

国際移住者の宗教活動に関する地理学的研究の展開

—1990年代以降の英語圏における研究動向を中心に—

川添 航*

*立正大学地球環境科学部

本研究では、移住者の宗教活動に関わる地理学的研究について、日本国内での研究を遂行する際の方向性・研究視点を議論することを目的とした。英語圏における先行研究では、宗教コミュニティの形成・変容や宗教活動が有する役割が検討されてきた。また、日本国内では、多文化共生をめぐる公共的な課題の中に宗教を位置づけ議論が行われている。宗教施設や宗教コミュニティが置かれる状況は地域的に多様であり、それぞれの地域で異なる認識・役割が生じている。その際に、移住者による宗教施設の設立過程や地域社会における宗教の役割、移住者のアイデンティティに与える影響を踏まえた地理学的な分析が必要となる。また、ローカルな社会経済的・政治的背景に規定された個別の移住者の日常生活と宗教活動との関係を検討することで、移住者をめぐる多様な地域的背景を踏まえた議論の中で宗教活動の特徴や独自性を解明することが可能となる。

キーワード：国際移住、宗教活動、宗教コミュニティ、トランスナショナリズム、宗教地理学

I はじめに

1990年以降の宗教地理学では、グローバル化に伴う国際移住の拡大や情報・文化のボーダレスな流動が宗教活動へ与える影響に関する議論が行われてきた。Kong (2010) や Olson (2013) は宗教活動に影響を与える社会構造の転換の一つとして「モビリティの増大」を挙げ、国際移住の拡大と宗教の関係についても多様な視点からの検討が必要であると指摘した。国際移住の拡大はホスト社会での宗教現象にも影響を与え、宗教施設の分布や宗教活動の変容などそのダイナミクスを方向づけている (Sheller, 2013; Obadia, 2015; Brown and Gilmartin, 2019)。

これまで、国際移住者の宗教活動を対象とした研究は主に英語圏の宗教社会学・移住研究などの領域から取り組まれており、地理学では隣接領域の成果が積極的に参照されてきた (Henkel, 2005)。また、2000年代以降は宗教社会学の領域からも宗教活動と地域の社会・文化的背景との関連につい

て関心が持たれており、個人的な信仰と地域社会の社会・経済的文脈の関係を踏まえて宗教現象を分析する、宗教共同体の地域的様式への着目が求められるようになった (Hervieu-Léger, 2002)。また、宗教活動には地域の社会・文化的要素との関連・競合により多様な意味が付与されており、その実践を通じ宗教的な場所が形成される過程とその要因を捉えるアプローチ (locality-based approach) も提示されている (Knott, 2009)。以上、宗教研究全体において、宗教現象の展開・変容をローカルな社会構造との関連の中で捉える視点が共有されてきた。

日本国内では、1980年代以降、アジア・南米出身のニューカマー外国人が急増した。国内の研究動向をみると、ニューカマー外国人の永住・長期定住化が進んだ2000年代以降、移住者による宗教施設の建設や宗教活動の展開について宗教学・社会学の領域から研究・報告が行われている。多くの研究はキリスト教会やイスラームにおけるモスク、仏教寺院などの宗教施設を分析の基本的な単